インフィニット・ストラトス00V

アロンダイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトスOOV

【Nコード】

N7635Q

【作者名】

アロндаイト

【あらすじ】

女性にしか扱えないパワードスーツ・・・その名も「インフィニット・ストラトス」略して「IS」。これは2人の少年がISを起動させてしまったことにより、2人はある学園へ入学することとなる・・・そう、IS操縦者育成機関「IS」学園へと・・・

プロローグ（前書き）

ちよつとESの小説を書いてみたいと思って書いてみました！良ければ読んでみてください！

プロローグ

「なあー夏、これって……」

「IS……だよな」

高校受験の為にとある会場に来ていた2人の少年がある物体を発見した

女性にしか扱えないパワードスーツ……その名も「インフィニット・ストラトス」略して「IS」。

それが2人の目の前に二体置かれている

このISは元々、宇宙空間で活動できるように作られたマルチフォームスーツであるが宇宙開発が進まず、兵器として留まってしまった「飛行パワードスーツ」である

これは、そんな女性にしか扱えない物を起動させてしまった2人の
少年の物語である

プロローグ（後書き）

どうも、アロンドイトです

アニメと小説を読んで書きたくなり、書いてみました！

どうぞよろしくお願いします！

第一話・女の子だらけのクラスメイト（前書き）

と言っことでようやく第一話を投稿できました！相変わらずの素人ですが読んでください！それでは始まりませう！

第一話：女の子だらけのクラスメイト

「全員揃ってますね。それじゃショートホームルームSHRを始めますよ！」

黒板の前でにっこりと微笑んでいる女性は一夏と亜樹人のクラスの副担任でもある山田真耶先生。やまだまや

身長は低めで生徒とはほとんど変わらず、服はサイズが合っていないのかだぼつとしていてさらに小さく見える。山田先生がつけている眼鏡もサイズが大きいためずり落ちそうになっている。

「それではみなさん、1年の間よろしくお願いしますね」

山田先生が元気良く挨拶をしているのだが、教室は妙な緊張感に詰まれている。誰一人反応が無い。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。え〜っと、出席番号順で」

そう言いながら少しうろたえている先生がかわいそうだったので、何か反応をした方がいいかと思ったが、この妙な緊張感があってはそれも出来そうではなかったので諦めた。

その妙な緊張感と言うのが、6つある列のうち真ん中の2列……つまり教卓の前にある最前列の男子2人の席にクラスの女子の視線が集まっていたからである。

ところで何故2人だけなのか、それはこのクラスの男子が2人だけしか居らず、それ以外が女子だからだ。

そんなことを考えていると後ろから女子の話す声が聞こえて、俺は隣の男子生徒に視線を送ると、その男子は俺と同じくこれはきつい！と言った表情をしていた

「織斑一夏くん！」

「あ、はいっ!？」

油断していたのか、突然声をかけられた一夏の声が裏返る

「あつ、あの大声出しちゃってごめんなさい。怒ってる？怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ごめんね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

先生が何度も頭を下げているので、俺は一夏にアイコンタクトで「

とりあえず自己紹介しとけ」とサインを送った。

すると俺のアイコンタクトの意味を把握したのか一夏が頷いた。

「えっと、織斑一夏です。 よろしくお願いします。」

挨拶をし、お辞儀をしたあと顔を上げてから一夏は女子から『これで終わりじゃないよね?』とか『もつと色々しゃべってよ』みたいな圧力を受けていた

おっと紹介が遅れた、俺の名前は鳳麟寺 ほうりんじあきと 亜樹人

なぜ俺と一夏がこのIS学園にいるかと言うことを簡単に説明しよう

高校受験シーズンの真っ只中、幼馴染でもある俺と一夏は自宅から近く、学力が真ん中で学園祭が毎年あり、さらには学費が安く卒業生の九割が学校法人の関連企業に就職する「私立藍越学園」

その藍越学園を受けようと思っていたのだが、昨年起きたある事件のせいで学校が試験会場を3日前に通知してきていたのだ。

その開場と言うのがある施設の多目的ホールで試験が行われること

になっていたのだが、俺たちは迷ってしまっていた。

「一夏、場所どこだかわかるか？」

「悪い亜樹人、俺もわからん・・・」

そんなこんなで施設内を彷徨っていると、試験管らしき女性に着替えをするように言われ、俺と一夏はドアを開けた。

ドアを開けるとそこには「IS」があった。

正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォームスーツ。

しかし、想定していたものとは逆に宇宙進出は進まず、スペックを捨て余した機械は『兵器』へと変わり、その後世界各国の思惑から『スポーツ』へと落ち着いた。

俺と一夏がISに触れるとISの操縦方法や性能・特性など膨大な情報が頭の中に流れ込み、まるで最初からISのことが分かっていたかのように理解できた。

その瞬間、『女性にしか操縦できないISを操縦できる男子』が2人誕生した。

これが俺と一夏がIS学園に入ることとなった原因であるが、その一夏がとても焦ったような顔で立ったままだった。

おそらく、このままでは暗いやつのレッテルを貼られてしまう！とか考えているのだろう。

「以上です！」

そう言った瞬間、何を言いか期待していたクラスの女子が全員ずっこけた。

パン！

「いつてえ……」

ふと顔を上げてみると、すらっとした長身に黒いスーツとタイトスカート、鋭い吊り眼の女性が立っていた

「げえ、関羽！」

パン！

一夏がまた叩かれた。アレは何度食らっても痛いんだよな・・・

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者が」

低めの声、顔を挙げた一夏は驚いた顔をしている

その人は「織斑千冬」。一夏の実の姉で職業不詳、家にも月に1、2回しか帰らないという人が何故ここに？

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

山田先生の言葉を聞いているとどうやら千冬さんはこの学校の教師らしい

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出

来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

さすが千冬さん、なんとという暴力発言。

しかし、教室には恐怖や困惑のざわめきはなく、黄色い声援が響いた。

「キヤーー！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 南北海道から！」

いや、この学園には世界各国から生徒が集まっているんだからどこでもいいじゃん。

きゃあきゃああと騒ぐ女子達を千冬さんはかなりうつとうしそうな顔で見ている。

「……全く、毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。呆れて物

も言えん、むしろ感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

何か考えがあるんじゃないですかと教えようと思ったが、実を言う俺も昔よく千冬さんに叩かれていたで、今言つと叩かれると思ったのでやめておいた。

「きゃああああっ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡して〜！」

クラスがこんなに元気で何よりだ、それに越したことは無い。

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は」

なぜか千冬さんは昔から一夏に厳しかった。

「いや、千冬姉、俺は」

パン！ 本日三度目。千冬さん、頭を叩くと一回で脳細胞が5000個死ぬんですって、と言うことは今ので合計15000個死んでますよ！

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

一夏は千冬さんに言われて直したが時すでに遅し、俺や箒は知っているからいいが、女子にとんでもない事がバレってしまった。

「え……？ 織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で『IS』が使えるって事もそれが関係して……」

「うわあ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

うん、最後のは放っておこう。

となると必然的になのか、一夏の隣の席の俺にも注目が集まってきた。

「あなたも千冬様の弟なの？」

「いや、違います・・・」

俺のその言葉を聞いた途端に女子のテンションが落ちた。

また何か期待してたんだな・・・

「織斑のついでに、鳳麟寺、お前も自己紹介をしろ」

「え？ あの、俺は鳳麟寺なので『ほ』はまだ先のはずなのですが・・・」

「男は2人しかいないんだ、いいから早くしろ」

「はい・・・」

千冬さんに睨まれた。相変わらず怖い、コミックとかなら「ギンッ！...！」とか効果音が付いていそつだ。

俺は深く息を吸い込んでから自分を落ち着かせた。

「鳳麟寺 亜樹人です。織斑一夏君とは昔からの付き合いでいわば幼なじみです。分からない事がいっぱいあると思うので、どうぞ皆さんよろしくお願いします。」

ふう、何とか言えた。

礼をするともものすごい拍手が起った。

山田先生を見てみると、なんだか眼の幅涙を流して感動している。

千冬さんは笑いを堪えているのか、顔が引きつっている。

俺の自己紹介が終わり、自分の席に戻ったところでチャイムが鳴った。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君にはこれからISの基礎知識を学んでもらう、半月で覚えろ。その後の実習だが、基本動作も基礎知識同様、半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても私の言葉には返事をしろ。」

『はい!』

おお、またしても千冬さんの理不尽な暴力発言・・・

「おい鳳麟寺、お前何か失礼なことを考えてないか？」

「いえっ！ 何も！」

俺の考えがバレたのか、千冬さんに睨まれた。うわぁ、やっぱり怖い・・・

「そうか、ならいい。」

そう言うと千冬さんは教室を出て行く。

授業日程を見てみると10分後に一時間目が開始される。

と、その休み時間を狙ってかクラスの女子が一斉に俺と一夏の所にやってきた。

「ねえ、織斑くんの趣味は何？」

「鳳麟寺くんは何か好きな食べ物とかある？」

俺と一夏は女子に取り囲まれて狼狽していた。

（俺の学校生活は大丈夫なんだろうか・・・）

俺はそんな先知れぬ不安を抱いていた。

第一話：女の子だらけのクラスメイト（後書き）

こんにちは、アロンドイトです。

第一話いかがでしたでしょうか？

これからも頑張って書いていくのでよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7635q/>

インフィニット・ストラトス00V

2011年9月25日08時44分発行